

「縁」を紡いで「恩」を返す

原田 尚志



この原稿を執筆している三月は卒業シーズン真っ只中で、職業柄いろいろな場面で挨拶をする機会があります。スピーチが苦手な私には少々しんどい季節ですが、これから社会へと巣立っていく若者と学生時代の自分とを重ねあわせながらいつも決まって、「縁」を紡ぐこと、「恩」を返すことの大切さについて話すことにしています。ここではこれまでの自分自身の経験をもとに、この「縁」と「恩」について書きたいと思います。本稿の意図に沿えるかどうか分かりませんが、これから研究者を目指す学生、ポスドクあるいは企業研究者の方々に少しでも参考になれば幸いです。

博士課程進学と就職活動

私が学部、修士課程に在籍していた当時はいわゆる就職氷河期と呼ばれる時代で、厳しい就職状況に置かれていました。かく言う私も例外ではなく、日々エントリーシートと格闘していたことを覚えています。結局、第一志望の企業から内定を得られなかったことを機に、博士課程進学を意識するようになりました。進路に迷っていた私の背中を押してくれたのは、当時の研究室の恩師でした。出来の悪い私の指導はさぞ大変だったことと思いますが、最後まで本当に丁寧に面倒を見ていただき、何とか学位を得ることができました。先生とのご縁は現在でも続いており、事あるごとに叱咤激励をいただいています。

学位取得の目処が立ったころから就職活動を始めました。すでに結婚していたこともあり、より安定した正社員採用を条件に就職活動を行い、数社から内定をいただいたものの、研究職採用ではないことから就職を決めかねていました。その時、「自分が納得する職に就いた方がいいよ」という妻の心強い言葉に後押しされ、内定をすべて辞退し研究職で雇用先を探すことにしました。卒業が差し迫った二月末、幸いにも(株)海洋バイオテクノロジー研究所のプロジェクト研究員に採用していただけることになりました。

企業研究所でのポスドク時代

海洋バイオ研での生活は、それまで大学の一研究室と

いう狭い世界しか知らなかった自分にとって非常に刺激的环境でした。企業から出向している方、私を含めたポスドクの方、国内・海外からの留学生、地元釜石の研究補助員の方など、多種多様なバックグラウンドを持つ方々と交流できたことは今でも財産となっています。残念ながら研究所の閉鎖により二年間のみの在籍となりましたが、その後有難いことに当時の上司からお誘いをいただき、プロジェクトを引き継ぐ形でキリンホールディングス(株)フロンティア技術研究所に二年間お世話になりました。この企業研究所での通算四年間のポスドク経験を通じ、数多くの素晴らしい出会いに恵まれました。特に上司との出会いは、私の研究スタイルや考え方に強く影響を与えたとともに、現在専門としている微生物の代謝工学的研究の礎を築く重要なきっかけとなりました。

民間企業から大学へ

キリン社でのポスドク任期が残り一年となり、次の就職先を探す必要がありましたが、この時もやはり縁に救われました。海洋バイオ研在籍時に共同研究先であったことが縁となり、神戸天然物化学(株)に正社員として採用していただけることになりました。二年少々でしたが、気さくな社長をはじめ頼れる上司や同僚にも助けられるとともに、企業研究のやりがいや厳しさを徹底的に学ぶことができました。その後求人情報を偶然目にしたことがきっかけとなり、現職の鳥取大学にご縁をいただくことになりましたが、今でも前職在籍時からのご縁は続いています。

私の研究生生活は、恩師、家族、上司、同僚をはじめ、紙面の都合上この場を書くことができなかった数多くの方々との「縁」を紡ぐことで支えられてきました。しかしながら、お世話になった方々に「恩」を返せているかと問われるとまだまだ自信がありません。昨今は人とのつながりが希薄になったと言われることが多いですが、一昨年の震災を契機にそれを見直す動きが活発になってきたことは喜ばしいことです。教員という立場となった今、「縁」を紡ぎ「恩」を返すことの大切さについて将来を担う若者に伝え続けていくことが、今後私ができる本当の「恩」返しなのではないかと考えています。